

学籍番号・氏名：

第3回：会社とは誰のものか（カゴメ）

A) 所有と経営の分離

株式会社は基本的に、_____である株主が会社の支配者となり、その利益の分配に与るシステムであると言えます。

創業から間もなく、会社の規模が小さなとき	会社の規模が次第に大きくなると
株主として自己資金を出資した_____が、会社の経営者になっている場合が多くあります。	大株主である創業家は経営の一線から退き、代わって_____が、かつて創業家が有していた経営職能を担うようになるのです。 これを株式会社における「_____」と言います。

B) 日本の株式会社制度の変遷

第二次世界大戦以前	戦後（1970年代以前）
三井・三菱・住友など大資本家によって財閥と呼ばれる企業集団が形成されていました。財閥家族は持株会社を通じて_____を支配するという形態をとっていました。	戦後の財閥解体は、それまで財閥によって所有されていたこれら事業会社の株式を、一斉に市場に放出するという効果をもたらしました。この「_____」に伴って、証券市場全体に占める個人株主の比率は7割に達しました。

1. 機関化現象

1970年代にはその比率が逆転して、80年代以降は3割を下回るまでに至りました。「_____」が進んだのです。

「株主の機関化現象」：証券市場において、_____が市場への直接参加の度合いが低下し、生命保険会社や投資信託会社などの_____の比率が高まる現象のこと。

株主の機関化現象の源では、1950年前後、株の民主化により大量の株式が一挙に株式市場に供給されたことで、当時の_____とも重なって株価の低迷が生じ、株式の買占め、乗っ取りの_____ことがあげられます。これに対抗するため、1952年の_____発効によって占領下の規制が解除され、旧財閥系企業を中心に企業グループが形成されると、_____を中核として同系企業の株式の相互保有が進みました。いわゆる「_____」です。

学籍番号・氏名：

第3回：会社とは誰のものか（カゴメ）

2. 持ち合い解消

1990年代初頭の_____を機に株価が長期にわたって低迷すると、株の持ち合いは次第に含み損として企業収益を圧迫するようになりました。

とくに1990年代後半から金融機関を中心として「_____」の動きが強まり、日本的株式会社制度を支えてきた安定的な株主構造の維持が困難になってきました。

2004年には景気回復の効果もあって、市場全体でも個人の持ち株比率が約5割と急上昇に転じ、_____等との比率の逆転を再び見せることになりました。そしてカゴメにおいても_____の急激な拡大は、創業家および持株金融機関中心の株主構造を変質させ、2003年3月期以降は一般個人株主の持分比率が39%となり、創業家の3割を追い抜いたことで、いよいよ事実上の「_____」を実現させるに至ったのです。

C) 日本企業における経営者支配の特質

1. 経営者支配の弱体化

日本における株主の機関化の現象は、株主権力の再集中により_____につながった米国の場合と異なり、あくまで経営者支配を温存させるものであったことに注意する必要があります。

株式の持ち合いによって安定株主になった金融機関・その他の法人は、_____に基づいて株式を売買するのではなく、長期にわたって株式を保有し、基本的にその会社の経営陣に同調的な態度をとります。

2. 日本企業の経営者の特質

もっとも支配権を与えられた日本企業の経営者は、その権限を_____のために行使することは基本的に許されておらず、自らが経営権を継承した会社を維持・繁栄させることが求められます

とくに日本の大企業の経営者の場合、従業員出身の生え抜き社長であることが多く、自ずと_____の利益に配慮する傾向が生まれます

3. 日本企業の性格

日本企業では、組織の中核メンバーたる_____を中心として、_____, _____, _____その他の_____ (stakeholder: 利害関係者)の個別利害を包摂する_____として会社が捉えられており、会社それ自体の維持・繁栄が関係者の幸福につながるという信念の構造が存在していると言えます。